

庭婦
訓女

冰
吹
妹
脊
山
二

竹
子
雀
孔
圖

亭
環
塚
求
馬
塚
の
事

味
酒
屋
乃
圖

於
三
輪
か
事

~ 13
3100
2



へ 13
3100
2

秋味香山卷之二

江戸 振鷺亭主人 著

長紙

三輪味酒店の套
附 子太郎孝行の事

大和の國三輪の郷に著右衛門と云る者ありまゝ三時の養母のぞこ
膳に對て箸代いゝゝた恭敬礼拜してあり有がやと聲のあげたり
とく隨喜の泪をまじされむる人怪むるなり故に人字にて
箸右衛門と呼ぶれ生得慈悲のころ淡く恒お乞巧おび病人
をいんぐの志きりに涙をうかゞ路のほとり五糧分然とれ者おん
み飲食をわへあひハ病を看侍するその形きみこれに
施すことその数をあはびあて小酒店代いとまじが殊目の量を

昭和九年
七月三日
購求

培を以て事人の目よありかて本鉢をも失ふをいかなど同ふ
著右傳門のく我六十あるも家を譲るべし一子もはし是を
ありふ前生めて善根をせしゆ人今世に費ひ老く養ひ死
て吊るべし子もなれば因果の者なれば罪業は果もあらん小債
つれは渉も我子ふふへけると人へ却て喜ばしされば店もあふ
人の中にいままで飲りしれも持あせりたあその忘念のわざ
もあそりけりば價をいよとせし遣ぬ羊ごう酒の量を余さふ
せーそのあふやありけり老の今あはるを疾病の愁ありして經紀
もいよせ唯其日の糧あごみ宛まば余の財宝は何せんと言
られかたが為人く公なるに、いふる凶惡の徒も酒の價は
損へるりのあはれかあつら利潤ありて家産昌ありたる一日隆
冬このころめて連日大雪降つた朔風凜冽なるに著右傳の寒氣
をふせがんと熱酒を喫し中暖をおる人のりまに店の端らぐ
出つ酒氣の真とてなるに雪氣を眺望するも正ふらの雪天地
さるがら銀世界のごとく柵紫の風あはつて賜梨花の乱と散を
疑る王孫綺席も金尊を倒し美女紅鑪も獸炭を添の耐なり
ちりまて著右傳の一滴の癖ありる類のちり路も潔白なるその
ありとてなるを足を愛し寂多放飼となしおけるが只見が杏小白
鸞の親子はれて雪踏を漂々とあはるありてもあはれと近く
あはるまにんやまの踏あはる人なるが十二むるれ子の老人の
は次引くすあはれ其ま雪おひさぬれく全身真白ふ
なり道ゆく泥脚下ハ悉皆踏雪のあはれ小宵より著右傳のありら、

しやせし

七二

一

我が家小方と酒を帯て凍る小那人こそな四支も截るごり
あつらんと思像てんわらん小茸々ちりなりかの老人吹雪一
目しやうやう測ふつるが風と吹くる雪洞ふふきたをされ撲地と
次子の手扶く抱起さんとすれど力微しと起しほと老人とらて又
跌滾々と起さるる雪まらめとなりけり子ゆきくやよんとなまけ
てたぐよと声を奉泣叫ぞ哀なりつる小志のびね著右浦門の立被れ
間もおそしと雪ふひとぬもいそげ走つて老人を撻起し我が家よ
果とまるとまを引てやうやく驛裡ふとものるじろ老人びく凍る慧
振ひ自ら編身の雪を抖ちて歯を鳴しけのいふ事もなりのかど
著右浦門一捉の酒を熱するごとく盪て両碟の温麩を搦出しついで
煖とまるといふ老人さるるに喫せけて我親子の沈落し故々を離

まきりつをにじなれ旅なればうく酒食お矯てふろくれ盤纏くた
あり此おわらわらびじといふ著右浦門かどか乏をさうて公中惨然に此
大聖小腹内飢て寒き雪次擡かじ價おおよりどととて父食と
進んで老人いさく價あはして貨物を貪る理あらんやと著右浦門が
ことごとく成まるとしうらびおろふおぞすとし氣あててて我酒食以集ん
くわ瞞く呼引いじしとなおりされ我の志ありて修行者お施を常
とすれが強ち辞し給あると再三いふ老人辱じさるる切あする
をそむくもゆるや小厮よびてんといふ此子又辞と父又い我の
飢ねば你よまよとんと命どれと尚も成つとて辞と著右浦門くれ
が切しやかくむりれ平れを心も感し其貞をんま藍縷一衣小腰
巾おととい素足は八搭の草鞋を穿られが靈質清らうや秀何とせん

のり
三

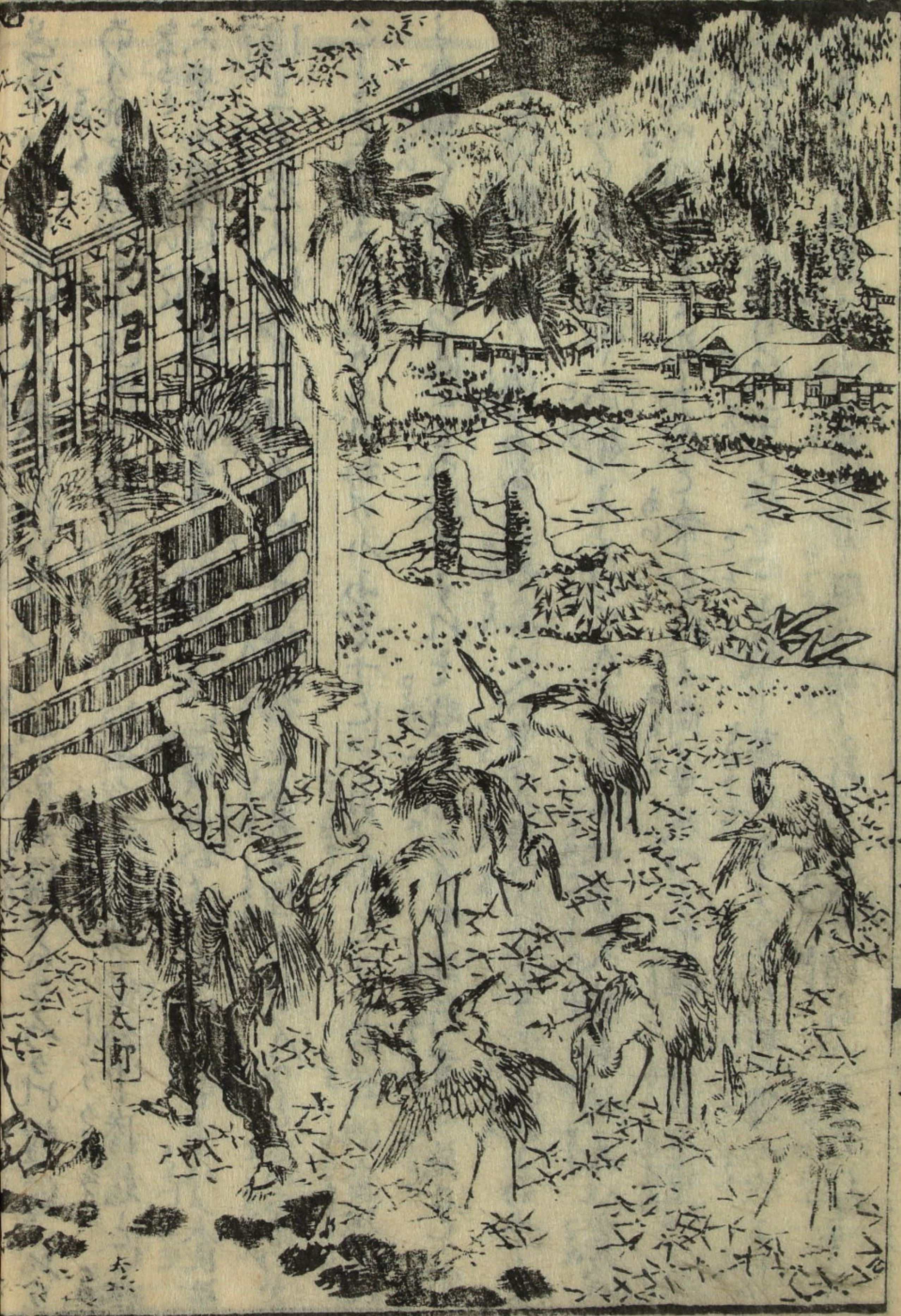


名物
味酒三輪

著作
著者

著者

大守少貳



子太郎

半 終りしごとく由親くる者を召さば其齡六十あり凡し敢究て食し
全體匹夫の相うらねばこそ令即なりやと同ふ老人さると答ふ
歳ふるりたるあやと同へば老人いふとや十二歳めてひが敢小れ
を子太郎とあふたあやせりとの詞よついで若右衛門打斂候偉なる
今夜甲子なれば我賈祝したまひ大黒天因るが子を郎君も進
ぞいざと三輪の味酒素麩と此所の名産なればこのこへし
と戯るるがりに強みぞ於茲さうばとて合あふしが父子もこと
飢餓の耐るれば狼のどくしに食ひ奠れどくしに嚙よりちれ喫し
あふりして老人懐裏より錢を出して酒食の料を償ふとも若右衛門
あつくりけど却て面色よくねば老人いふとと鈔をおめて子万歳
けしとを落居をやうて出まき身刷れば子太郎内は再出の尺貝
いよくあまをりゆくへた路もこへてを往来もてくこや返照れ湯の
声淵あははくれ鴉の啼も悲しくて子太郎躊躇とれば老へへの
聖とおやこかといふあまの連ふらつし此る雪のおくことよと子太郎
泪はしんとてあつとあや子がゆさうゆれ其分せだ著ち流つるお忍び
も此降雪れ夕ぐさとお何地へうゆるべに今宵のやどし進せん倡を
多度撥て脚の湯をひかせ熱おのせせらるの世に遭がれ情なりける
日既ふ晚けしは客房も歇せし被窩をもゆきと烘火えに
ぬ父子枕を併つて語りしごとく誠も凍死するはかぬ慈悲
なる人ふ救はしかじするまよさうりおが打攪あつるを公安うね
ハ明日のちく打立をしましあ子太郎さもこそと答つてもいや
あまの病なりしが夜半にかりて老人風寒もあつるれ火のどく熱人発

半 終りし

五

氣喘きぜんふあびたてね子こをしりめえせぶあらうには乾くわぬと湯ゆ水みづをそとけて
 されいも宿のまに起し湯水みづをめとせんも公好こうむ父の煩悶ぼんもんを者が
 かんもみせんさんがくたい摩あさりて天明ていめい次つぎ結むすぶわるじ漸あらじ雞けい鳴な曉あけの
 天あまもあらまりしかと雲うみの朝あれの主いまと起やぬ小こ公こうをさやま
 せじが少頃ちかと咳嗽せきせきの声をおよよ嬉うれし中と走歩そうく父が熱あらじ
 され湯水みづをめとせる次生なるに著ある湯のゆとその些の寒氣さむと受
 むらぬやと急を湯水みづ滾こて房裡ふらり共ふ扶起たて両腕うで
 を喫めし小こ人にん眼まなこを睜れ著る湯のゆが効小こ在あらじと起こらる水激し
 ちろる次著ある湯のゆが効小こ在あらじと起こらる水激し
 取出とり出す蓋をそとけからる冷となれといひて起出たる面火あけの汗あせ
 むらぬ又あらじ汗と同小こ子こ太た郎らう摸もむる汗あせ
 りあらじと寒氣さむ氣き受うけしる人を中に医師いしを請く熱をこらす
 ざらぬ傷寒やうあらじおりておろしかぐんと咳ハ子太た郎らうは頭を叩悲かな
 と妻やな牙ははは針はりを用ひがく父次つぎ者もの死し小こらす
 のこらすのあらじ御おん慈じ悲ひの藥をめぐ救給たまふ我一いつ生せい御おん家け小こ
 断たてりて骨が碎れ御恩おんは報ひりめと泪なみだと共に額あらじ著る湯の
 其その孝こう心しんが感たるあらじと視みてべと我家け小こ舎せも宿世しよの因縁いんえん
 子こ太た郎らう世よふられ去げ小涙なみだが噲此こゝ深ふか雪ゆきふなどつららせすわらじとて
 我われゆめとらぬ次著ある湯のゆとその些の寒氣さむと受
 路みちのこらすのあらじ我われ走はしゆん小勿ならずなる事ことならじとて繕く兼打うち
 被き飼い馬うま小こ打うち騎りと袖打うちらるもなれといひて重重しんじゆんの夕暮ぐれ

山崎七山

卷之二

五

ともいふをいげふ信節お出ゆとされ子太郎今やおたしと待居
 ぬお多耐あつてして医師より打騎者右衛門の薬箱は背一尺餘
 子の雪お踐こころつ辛くて飯もあられぬ此時老人のや昏迷とこら
 小人車は省とて呼吸のこころの医師脈は診てしつとて
 感の傷寒あて風邪とや膝理お入治しがた忘る我薬をさへんが
 別人再者せよと驚もあつて河を放たれば子太郎夢で膝隆起と泪の
 こころあつて長の旅を抱へ便なれ我を憐れむ父をすくせとて
 とよめあ合せと泣倒る医師抱きかかひ人ども奈何とれはとら
 を著右衛門萬一のあつてぬとも決して怨むの理なし心すうれは薬を
 たび給へともいれらぬとて医師やう中薬箱は用と一貼の薬劑を
 撮り與へし生薬を吹く引と此薬を用と汗を治療の法あり告
 知とせとてあつてし行出され耐をたのこなけとば知れぬとて
 忙しく去り去り著右衛門の薬箱は抱てのこころ煎り起して喫し
 頭もえぬまてふ被汰蓋のけ子を即ち傷あり今や行勢と守候
 わらう著右衛門の病入拘り生意をも聞飯炊く間とて此あて
 漸午の貝ふくころおもなりて早膳や喫し子太郎をも喚と進み悲哉
 父が母の車のをえと飯も喉を下らと泪おのこ咽て吐をひし半碗
 も喰中とて父が抱かたにけとて者者疊々摸つ行や出ると候方と
 ふと申四支冷くさぞなりぬ嗟乎哀哉此は何國の人のやあつて
 三輪崎の旅まらう今世の雪の夕ぐれも其名は埋みまのしとて
 子太郎即ち父の尸殿ふとて生れたるおとて歎きは著右衛門
 憐れとて悲くしてさめくさめくさめとてられが子を即ちと哭つも父不

其の故郷にありし此浦里に歸りて我子に死して久しかりし
 かなしむるはくもえさぞまじふいふ甲うらんや中々も御家にて父子
 のこの代慈せしむるそのうれしき事いふばうて死しても忘しむるを
 父の疾の痊もせば此大恩に報せしむせんといひひひもなれたるは
 家々穢と扱ふことよき尸體をおさめんとおさめよかたは幼者責と
 棺をとりんあも錢なけしは何とせん藁はくもやうて葬れもあまを
 傳くひまけしはあまの道にゆかりに瘞おと一族をも捜
 尋く我を御へ亡骸入あつて窓母と渚共の工に墓を築けし精原なり
 此への大恩に允すこといふやと播口院平伏くもまこととみそ
 著古清門その孝心のいさほしく心刺眼にあらはれ愁腸が涙と成り
 ひとふ一門親族のかりひ次はしやがて人を雇ひ葬式の具次致へ行
 不浄水もいとととを屍を湯灌し棺も殮と懸ぬいころの傍に乞娘を
 塚の傍におくろて萬く葬ぬ其附の子太郎が歎死へいふふ盡と
 累七の吊次も涙切ぬいしありかて先陰するを夢なれやとや
 中陰もあくれが子を郎れの詞おそぞいぬぬ昔はは著右清門強
 とむるやう古郷の路のなども認るはしく知者の柩次搬入るもは
 がとされが好便次はく後をくるともおそくはじと知とさういふ子を郎
 らしは泣き跪き練みかたの御情海よりも深く山よりもまじ
 御恩をさして去る意ふあはねども永く貪りかたを公うさよ物
 の益めいさすとも我父小厮小厮とるが死なまて任まらるるは
 馬とも名を播くぬらめやと云々れが著古清門さがるれ心うらば
 我子とるて亡父の墳をも守るは孝親らめ女とすむるふ



ねとらう 子を即も竟小其洞小随へハ著右衛門太小喜ひ中々父子の縁を契
び天の賜れ嗣子ありとて鐘愛かたりとて子太郎ハ又主恩の
勤れり急る家封巾をさし只いと後われ亡父の墓小のりて悼
歎く子切あふ感せぬ考こそおろけられされを子太郎洵子ハ携
てありとめぐれ酒店の小厨あき躬ハ妙ハ業なから面見うつくしく
骨相優みやししくもみうら云うれ氣幸やてさおぐら真の女子の
やうあるあぞ是より子太郎と喚りの形く人とな字して娘子々々と
云慣せり時光箭前の下くその年もくれ又く久もるけし教日
大雪降つた焚木役く價貴けとハ子太郎芳村山の柴をまよとめ
まよとんととひしして父告馬や曳つ雪及及瀬とかくし芳村
山小のりね柳此街芳村ハ満山櫻樹母して花の盛あハ八重立今
白雪とまよとひ散花を雪かとのことめやまよとれちれその
中華までももまよとハそれとと流あま真小本朝無双の名勝なり
子を即眺とバ財今歳冬素雪の朝も木々の梢小は雪の
悉皆花の咲綻びとれよとひひ及るまよと藤尾坂と登る
に道のゆくてふ雪はゆめあり其まよと六尺あまうに雪及塊ね造り
おせれ童が玩の達磨の形なり子太郎遊ておろあまうとれを雪の
お中々に童をみてあまうとてしりのよとえかたふ不測や此達声せ
奉さもかなしげも號泣ハと苦げと呻吟されが子太郎肝及銷てあま
をそれと人影もはしとらう雪はゆめの人影をさる本あまうと早を
側まうと正しく哭ハ此達声あまうとれをよと知呆孩とて
いのも思ハるてけん

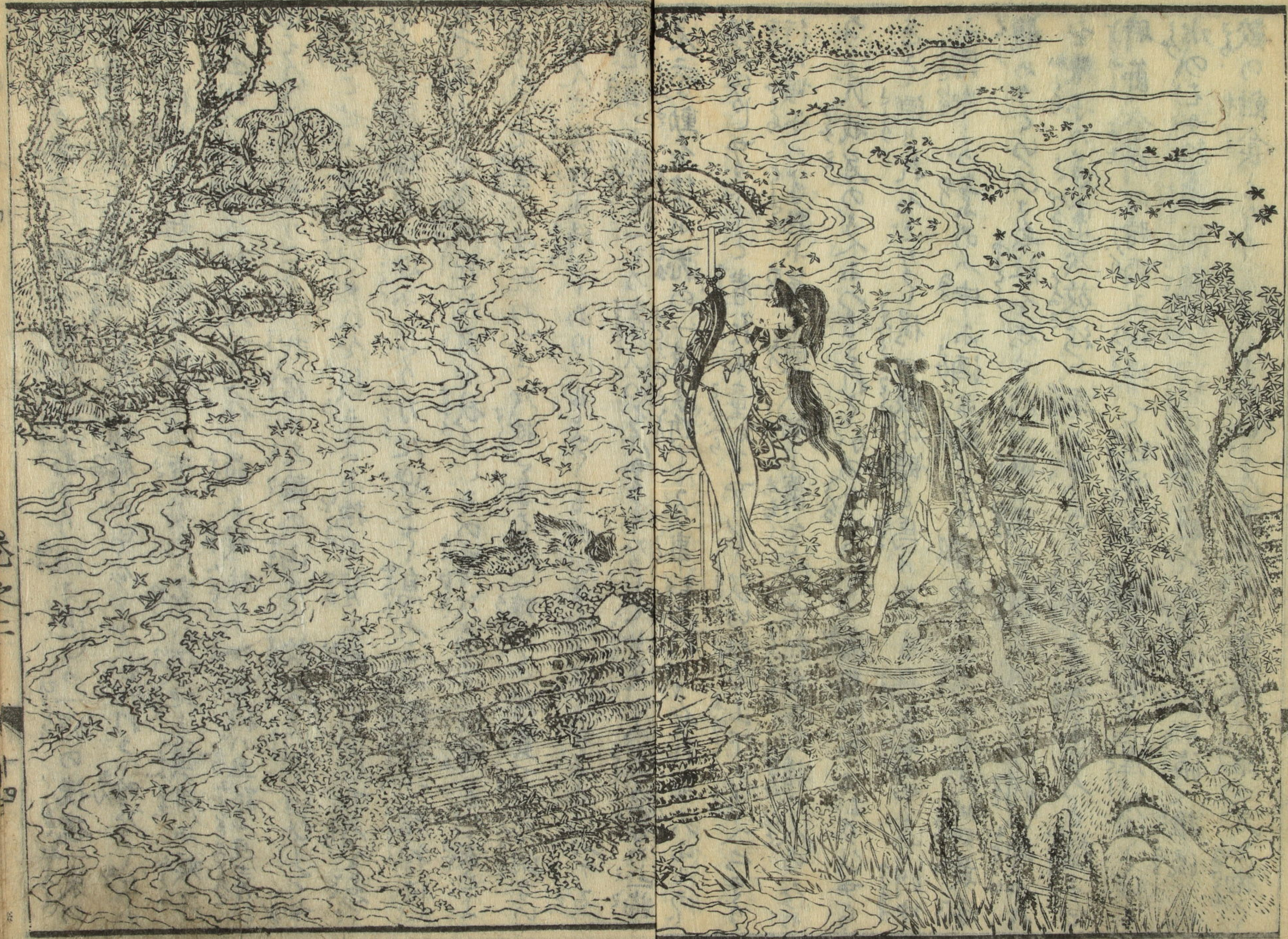
阿三膝は叫ぶははやいして袖は裸の穴穿くるされ撲地と作
が轉びつものやよくたをけてて情を慈悲よと母次合世拜巡るを
かまがり退けとてものづねぬ先盗人さへ責よと童も耳次批た
或の腋を扶るあり梳つ搏つ突倒し踏はじられく阿三膝へた人
と喊声どもたさるる者もあつたことさうり足より衣次剥素膚の
う人をあふ索あてぐるく縛る傍の石繫ふ那高童等もさあ
聖次搔ゆつめ小山のくはとさぬは月どちやうて玩の達广の歌よ
造做せしがあつりやあつりと手を拍くあつりや先盗人を埋
の刑は行ひとせしぬらやゆきねとて童等ハ笑とよめれ起まぬ呼
隣へし阿三輪と八寒地獄の若らも辛これふまゝるべ死とおけひ
やういふ悲しけれ此時娘子ハかたけ事故ハあつたに聖達广の啼き
を怪とわつれよ童等とよめれたあつりや仔細あつたと傍なれ群竹乃
影お躬を躲し馬を挂るえわつりし母童等ハくはりのあつりや聖しちあせし女
とや息も微しう泣声もせどえよまはひひひ違たの眼を穿し息乃穴
より覗えとまご死るぬそ穴心地よやなととめれたあつりや娘子笑とおつり
やうまそハ童等が所為ふ女聖まうめふ埋しと叫號しあつりや人いづる故
知らねども我もむじ雪小凍死ぬべたあつりや慈悲ある人よ救はし其つ附の嘘し
とやあ人が我身と一般の女の身れ苦とえん人雪の席しや何とけしと援
やうんやう童等があびやうし逐らうさんとおりひく雪がつなよ竹を
推挽撲倒開けらうくくさうてを放つ馬ハその響音お驚え振ひ嘶を
竹の音よりあつりや雀あまう一齋あつりと起しその羽音の夥しや
うつなれ童等驚彼女の意速るよと怖く珠の子と散ぶくは逃散

くの志をばしぬと娘子しそれ件の雪達を打壊み無慙や阿三輪
 舟も氷雪の層も冷とそり救苦の舟も封られ小々啼こゝの
 のりさばみとくく息もたゆ氣を縛り解きまぐく芳村を
 あれ又も童多襲身は疾あげよこの一声も阿三輪とつと云はさ
 ろりあんどみ生つ藤尾坂を走下れ七曲の方より童多あぐく
 まりやくて娘子を扯捉此馬士竹雀みくろて我くやあど
 け盗人を腕しかりしぞ奇怪けれ倡責呵とありかどあり
 抓踏作しとてか母搏とゆるこめ咎られふ課ねまといとよあ
 じしとて人と娘子の只撃とけ髪も掻みまされ衣も剥肉破と雪
 も血ふそとて骨も碎れむろりおるさりしも御所の羊物被り雪の
 下風もむるぐく高木履と踏ぐ豆腐提の由も某くが此分野を
 え拳動をば小瓶の一枝を折しより事おこればとせれ罪人あもあ
 移へいしやべと者れ童多やうくびりれく山下の方へくきり
 行へ娘子の半お篤く恩瓜射し蕭々として記本も情へ人のなれ
 むらび我方のうへおつまされくかの女をいふ落のひやとありひから
 こそく漂りたるどなく橋の渡り臨み馬りあも舟小葉やぐて河中
 小漕かしが葉あの中酒も酔く我者ありて馬をどく此奴最手
 腹めぐといひさぬ肚をさくか小撃馬を後と跳あがり河も踏入れ
 を娘子の手索り放れ馬も曳とく船より共のさつと隔とを
 時節余所の時雨も水増て逆波もく漲りおらて岸へくくゆる
 水のむかれ事宛龍門三級のぶくおれハ勿心ら紀の海へ推流され
 鮫の餌食となりもせんあまむばんやとるるまでめて誰う身を抱く

しんせき

巻之二

十一



山崎

卷之二

山崎

救あぐる者さし者々娘子二丁あまの流さじが一張の挽摺一束の
 藁柴をりくに搭住しぬ小撮属バそくとおくれ難なく丘小
 撥うれ誰く知らびさまぐに旁さく家ハ何地と喚声小娘子
 良公比つと目尻おたてえれば前ハ我扶し女なれば且強且喜び
 いそんじして舌うごうず我宿ハ三輪の山なりと救き門といひし女
 扶おこせしも動ゆれを後さまお抱て背お駈とかくして居をさぐ
 りどに猪環塚の辺ふり力たゆと息のよ此時娘子精神に
 りて正くなり溺死をえを扶しその辱れさるりに暢とバ玄とよ
 さらんこそ雪お凍死ぬべき救さるりし嬉しと責て一言謝すい
 らせんと渡はみ待とありしぬよくもあいまいせりよよといふ互
 ぬ危難を脱しその喜ひいそんちりもなきて女又いふ君の家ハ三輪
 の里我名ハ三輪と申せバ一世うね御縁とてりりと迄も送りまひ
 せぬとんハ三輪と申しとみと形は西國友のむすれあて悲し中
 小父母をらしうひ白骨が膚おひ便なれ身の故を成さるる道と
 躡ひありくおそ形も良もいとひなく雨露雪の涼山踏とる思ふ水
 ろりてうらたとをせあものわたれな者あてとりの二双眼涙を溼せ袂を
 絞るハ娘子笑てその我る答しれたるなり父母も古郷もななき
 つ孤子の身ありしハ公情あれた人ハ親ハ親の遺骨をばおこし
 が御身ハのまご考妣の白骨をもおさめねとや女子の身あていふ
 かり我身の上お合れて相像る事うねとるの感激の泪を揮
 ったかまのこらよしく我力なして御身が考妣の白骨をぬき
 進みまへ我親父とめて情ある人なれば此事を告るふ所し

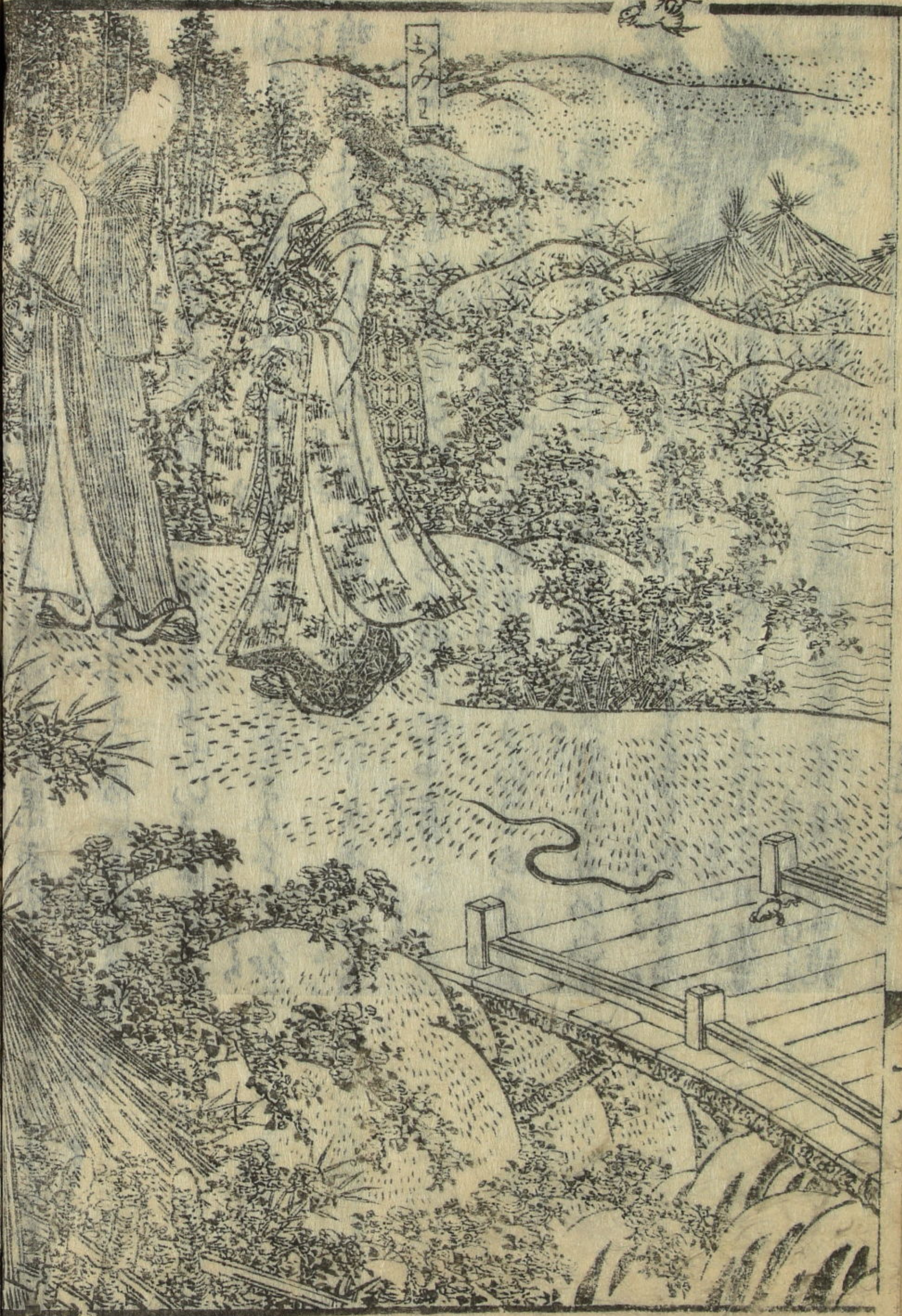
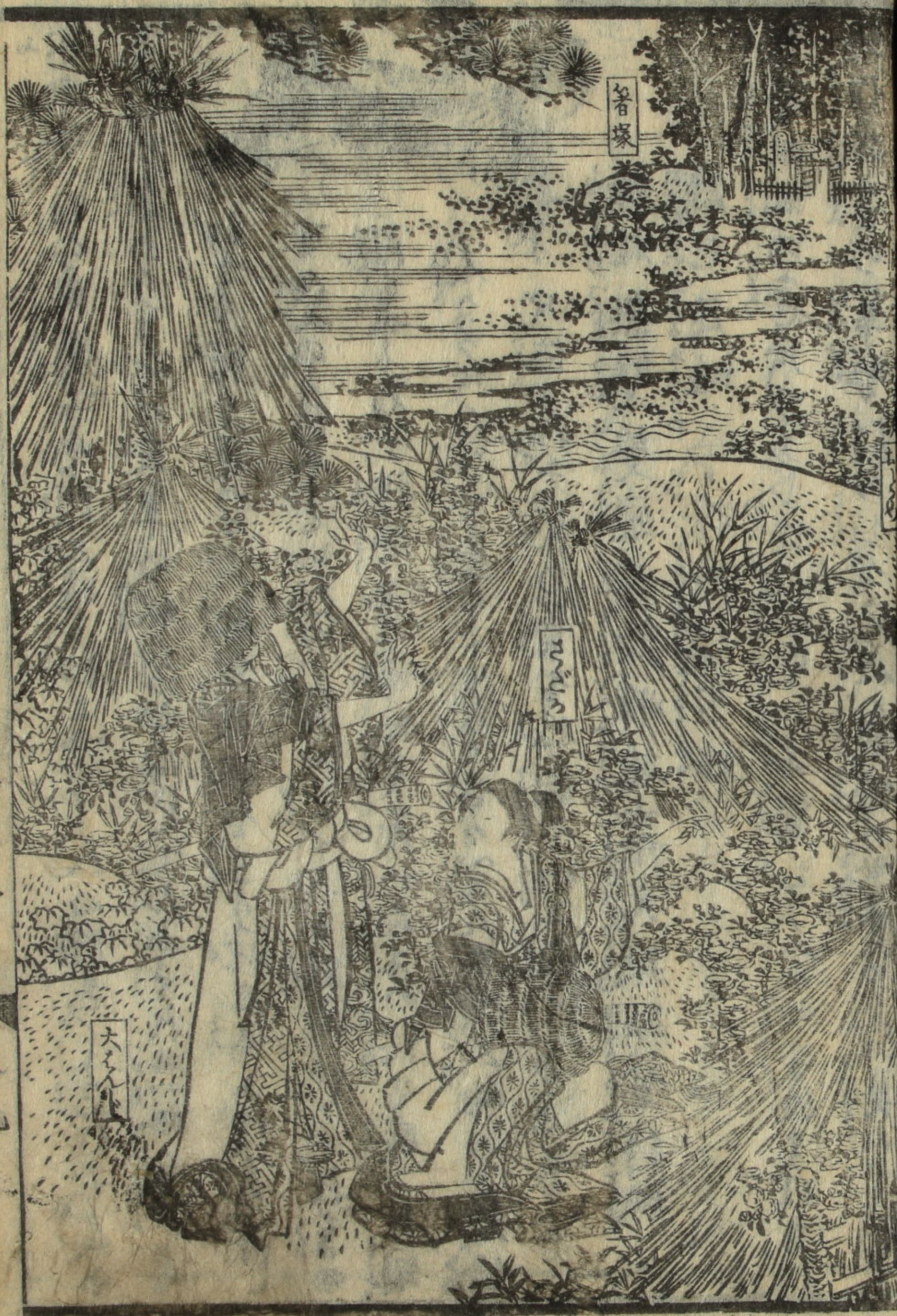
るる車へのあはれは少頃此所待てとて忙しく家へ歸りしに
 芳野を相互の危難をすくられし事情を一伍一十云々と清たれば
 著右傳のせてその如を借ひ来よといふを急が娘子の又諸環塚に
 耐へりてくその如を借ひ来よといふを急が娘子の又諸環塚に
 いされし阿三輪白骨の如ありてんとの言は葉のられしに辭し
 中へ著右傳の許しされし我子の恩人ありとて眞實に待し
 数日たればされし何れと力たて白骨を諸環塚のやとりし
 著右傳法華恭親のさる方もなれば阿三輪辱とすおのり高
 ちめらるるにまうせ差すゆくされもなれば覺えむころも月日
 ぞろろいとまはせんと思ふらら著右傳ふと感胃の土地より
 母のさるる大病とありしに娘子と共日夜肴侍し心のかきりつに
 不致是と医薬を求め神仏に頼れともまらふ其効なく月をわきて
 なやまじいさなく病人のころをながむる脊後めては泣きとせ真の
 親子ともなれば其情なき幸ありし著右傳門二人を枕のここと
 よびて我らや残端のまきとすのそめを懺悔さす幸あり清くもあら
 ともじや著右傳しむは杖も棄てて河田河をくぐり河中の筏に歇
 らば夜水小瀬とす女の流すつるを小玉の裡に抱ひし眉目好女
 のまぶ息をせぬお妙と惡心を萌し犯さんとせしが女の道なれぬ
 いさしうば又河に突流せしそれよりいほどおき妻子女にじりひ
 てとらまら一念菩提心を發起しそれより惡を造るは善のこ
 とくみかど老くちても養ふるべし子なれば死ぬるまじきに誰か
 みとるべし無縁の鬼となりおんと日ごとく此ことのみをうかりみし

とかども御心二人の命保をうけられしと云ふことにはおぼれど
 従令血脉の子ありとも不孝なるべからずかむうて芳らばこと
 天の賜れ我子とおひりか御心等只今夫婦となり祖考の祀
 かり終るを死ぬとも忘念なく快く目を瞑るんいうふやいのみと
 いひまされあそ二人の頂を僥と哭われぬ娘子のいひ我今夫婦と
 かりるば始より其意ありてこそと人お洩られ不義の名を取ん
 兄弟とあつたまやし不知吾子の公いふ事と同母女こそく兒
 病人の御心終るまで背らんやとみだりうらむれば著しは清つ
 悦斜なれば於茲杯なりあけ父子兄弟の因縁契ひ阿論一歳
 長しこれ姉と称し娘子と号とさすれ然るも其夕著る門
 二人代顧て決定往生唯今なりあは嬉やありがやと咲成合と

なう息絶る大往生は遂より實にこれ彼報恩經も或因慈心
 發菩提心と説くは是なるをまことしむ亡骸を遺言ふまのせ
 著塚の旁に墓を九晝夜の功果起薦むとかさるる中にも兄弟
 地以愴天み呼ひ號洵痛哭余所の目もたつ涙ぬされは著る門
 一つあま日らの陰徳もよりて孝順の親子二人まで授りその終
 善と二つあ兄弟が孝義の厚ことを賛歎せざれりか七那の
 けり亦口をぬれた者ありえうるにかまら累身とえせ、實はみとの
 変らむとさるる形と嘲るといふも人心不同いを佳人の志に識らん
 や是より兄弟互に敬ひ眠くころを并せ夜となく励みのい
 けれなく経紀日に裕ふるより一年余の間も老大の家産を
 興隆しつ家僕をもかへ火火の類まで悉く整ひ之痛の味酒店とて



其名かくれも那うりつれが這処彼所の富家より兄弟不姻縁を識りかど
 娘を決して娶る意ありざるを阿三論いふと平御方十九又れ二十ある
 ちの足寄りつ返り同家不仕え御方一生妻ありて子孫を後三六丈ある
 不孝可んやと再三練さくむるも娘子のいままこ遅るまはまきりて託し肯ね
 ば阿三論を月思ふやう身此家を嗣を道あるに仁義固き直質あり
 ば姉不譲ると見えゆれいり子に意み探さやとさもあふはは月八銀
 なりと云まりせまししと更我ハ寡女守がにゆくこ力もある人
 嫁して子孫の栄をもえまわしと語りて娘子のつみかたり親を
 不貞申してさもかきもまいたまふとりのくあふハ言もあふ心睨て
 互ふそらうそまきてぬらうと阿三も一羽の燕あまの母啼く家の
 内は飛うふられハ力と一番の燕あて幸ころさかれ梁のうへハ巢
 を築くころ一夜雄ハ雌あつれ雌ひとり巢のころいとこひらふ啼
 むぞわりのけや阿三論をばえん娘子あまのし燕ハ對し休も寡となり
 けびしの秋春あむる時ハ雌雄そろあせしとほしかりしが今秋ハひとり
 あるとも還るといふと悲しかりそとてとて心あふかろふは美
 雄ふつれあふりかると涙をまじしと啼つてもあつの草環くうと紅糸
 を燕の足に結属てこれハ又ころ秋ハてハ寡女とさりのひらうこよとの証を
 中と河を流言て放せが此燕其日よりいつあふんあふんかろふね不在
 話下これの互ハ姻縁のさの夢裏のもしひとぞ同眠同食その
 情しや厚かれともさく兄弟のれ正しく
 やふ燕あまの春もあふるハ一日暮りのあふ兄弟あり
 つれ出つり猪環縁あまの墳前跪と同向一



不測や一羽の燕舞とて阿三端が袖の中よりひねけりてこれぞ足お

志のしの糸ありては去年の秋つらひまじしてわかれ燕の今年も

ひとり飯のまつるよ能も我細をさうり代の鳥おはるるりし

可愛ののめやとりひつる脊は接るあも飼うらじしれるの

おもやぬぞ殊勝なり嗚呼貞節の志あり燕も感じぬ別

人うらみのつて鳥おごもあうさうべんや阿三端りと感懐



雌雄燕雙雙飛天設雌雄事久期雄兮得雌
願已足雌兮將雄胡不知

娘子此詞の意はつゞく味は心中大に驚きありあ女子にまれば
詩作措書の筆勢は詩の心をいれぬ我姉の女子うらぶ真のまじして

男子ありことにはじめより男のおいさうは語らまねけ怪むしこれ

あへ深き由縁ありあそと久く控卒お同かく詞ありてくはあふ呆

且しか何地もなく尺八の笛は音同おあああといとく久く又行

道すべしあありて好の面やえればははしく男子お定りしも半ハ

疑つて娘子塚おらう共お回向をさるとりしも又尺八の悲暮ま

し大籍をうけいねをさる娘子の愛の意を探ると一首の奇は書く

阿三端おえとれをさるお接て喰とんハ

宮塔井のりてありの小秋意をわたり風を待つと君とこそまて

と派つても阿三端り此奇の聖武天皇のまゝに浩海公のおんむきあ

光明皇后の上りせとあへる歌うらう御書が社書は後よおとく

は上代中うのかん女文字おかまじして極てこれハ女子の筆意なり

のちや^あ後^ごとある^{ある}御^{おん}身^み男子^{なんし}の^の挙^{きよ}動^{どう}とある^{ある}も女子^{じよし}ある^{ある}も^も酷暑^{こくしよ}の
 中^{うち}も^も阿^あ層^{じやう}の^の衣^い服^{ふく}を^を着^きて^てつ^つか^かは^はし^し唐^{たう}火^か露^ろと^と何^{なに}と^と言^いう^う嬌^{けう}弱^{じやく}語^ご言^{げん}
 織^お履^りを^を観^{かん}ても^も男^{おとこ}子^こう^うら^らぬ^ぬり^りの^のれ^れと^と知^し置^おけ^け今^{いま}の^のつ^つこ^こた^たま^まと
 確^{かく}然^{ぜん}と^として^{して}又^{また}の^の娘^{むすめ}子^この^のら^らと^とい^いつ^つて^て滿^{まん}臉^{れん}ら^られ^れま^まか^かよ^よ漆^しり^り羞^{しゆう}慚^{ぜん}は^は絶^つし
 か^かさ^さも^も監^{かん}定^{てい}と^とす^すの^のれ^れハ^ハ何^{なに}を^をつ^つこ^こら^らん^ん妻^{つま}ハ^ハ太^{たい}宰^{さい}少^{しやう}貳^に喜^き頼^{らい}カ^カ女^{によ}橋^{はし}と^とす
 者^{もの}少^{すく}と^とす^すり^り往^{わう}昔^{しやく}大^{たい}内^{ない}今^{いま}殺^{ころ}弘^{こう}と^と戦^{いくさ}つ^つて^て嘉^か吉^{きち}元^{げん}年^{ねん}極^{ごく}月^{げつ}十^{じゆ}五^ご日^{にち}の
 二^に款^{くわん}と^とす^す打^{うち}負^ひ父^ふの^のら^らも^も宝^{ほう}滿^{まん}嶽^{がく}の^の城^{じやう}を^を落^{おち}ろ^ろれ^れ刺^さ敵^{てき}の^の會^{かい}議^ぎ緊^{きん}と^とに
 父^{おと}下^げ郎^{らう}と^と身^みと^と竊^{せう}一^{いつ}妻^{つま}ハ^ハ男^{おとこ}粧^{じやう}扮^{はん}と^と大^{たい}和^わの^の國^{くに}へ^へと^と志^しと^と父^ふ墓^ぼを^をみ^みく
 も^も身^み故^こて^て此^{こゝ}塚^{づか}の^の雪^{ゆき}中^{ちゆう}に^に名^なを^を埋^うめ^めと^とぬ^ぬか^かく^く我^{われ}身^みの上^{の上}に^に覺^{おぼ}せ^せら^られ^れる^る
 女^{によ}子^こ相^あ見^みみ^みす^す又^{また}を^を換^かへ^へり^り故^{こゝ}に^に語^ごを^を入^いれ^れと^とい^いふ^ふ門^{かど}と^と論^{ろん}究^{きゆう}
 驚^{おど}び^びと^とす^すお^おの^の声^{こゑ}を^を側^{そば}太^{たい}宰^{さい}の^の息^{いき}女^{によ}橋^{はし}と^とぬ^ぬれ^れの^の語^ごを^を入^いれ^れ我^{われ}も^も真^{まこと}と^と

嘉吉元年八月十五日松原の城に
 龍石殿前亞相瑞雲珠天大居士赤松播磨守満
 義雅が政則九人我りなりとりしれ言語も常た後
 伊豆守正則とばへし此三場がみなりとかや又聲がひそめ

従^おと^とな^な腹^{はら}切^きて^てら^らせ^せけ^ける^る刺^さ母^ぼと^と我^{われ}の^の城^{じやう}内^{ない}より^{より}扶^{たす}出^だせ^せれ^れ伊^い勢^{せい}
 落^{おち}ろ^ろと^と見^み知^しれ^れし^しか^から^らぬ^ぬ女^{によ}の^の姿^{すがた}よ^よと^とい^いは^はし^し志^し木^ぎと^と傳^{つた}へ^へ
 身^みも^も又^{また}大^{たい}義^ぎの^の志^しめ^めが^がこ^こと^と妻^{つま}生^{なま}男^{おとこ}子^この^の妙^{めう}算^{さん}あり^{あり}真^{まこと}女^{によ}中^{ちゆう}
 丈^{あぢ}夫^ふの^のく^く我^{われ}お^およ^よが^が祈^{いの}ま^まめ^めに^にあ^あて^てる^るあ^あて^てり^り太^{たい}宰^{さい}赤^{せき}松^{そう}ハ^ハ原^{はら}水^{みづ}
 親^{おや}の^の水^{みづ}也^{なり}相^あ違^{ちが}洋^{やう}の^のふ^ふし^しの^の縁^{えん}も^も亡^な親^{おや}の^のひ^ひと^とあ^あの^のせ^せと^とい^いふ

今を見身とあふためて夫婦とあり家再興共の事
といふを橋姫訪ひ満面は溢てそのあふるまじもな
の心は君がこそきて雄兮得雌願已足と君が詩の詞
をべりぬらり形が人よれの道なれが親父の冥魂お
の盟をまじなんど之が政則九然くと打貞頭又りあ
到るはけ付遠山寺の傍の声返照を告げ花のりり
あられ昔のまのむら 著右備門が墓の前か夫婦拜
在がごとく搔口説我く今日より夫婦とありみ父の
と咽ゆも願がさすて媒なくして私お契のれおわ
車いふせはしやとあひづる節とてあれ翠竹の
ありてその媒始我くはんと噂りけて二人の愕然と
正ふられ二個の虚無僧一枚の粒粉めて編笠真深小被り
等しく搜り芝生お踏踏ね一個の鬘を剪り有髪れ尼の虚無僧
かゝ橋姫小眠よりてやあく 娘れ姫君よるはの傳母の狭
とくくえりあひりづるもいじや御父太宰少貳喜頼公の
御運はとて大和の方へと落しぬ世代志の娘御才なれ男扮
造進せとていへば入道あや 洗才をえりしは御行清と搜し
ふふだも巡あふ所のかとの娘子塚のうげよりえりし
猪環塚のいもつたせぬ御縁とて値りわすれらほし
わりがこやよと泣く涙を湧る泉のごとし一個の枕論も涙痕
咽すいも御曹司政則君えりしれいもや某のめこの推助
さりの播磨河落せしむの耐敵を欺く謀りて君が女子の状

あふるまじもな
の心は君がこそきて雄兮得雌願已足と君が詩の詞
をべりぬらり形が人よれの道なれが親父の冥魂お
の盟をまじなんど之が政則九然くと打貞頭又りあ
到るはけ付遠山寺の傍の声返照を告げ花のりり
あられ昔のまのむら 著右備門が墓の前か夫婦拜
在がごとく搔口説我く今日より夫婦とありみ父の
と咽ゆも願がさすて媒なくして私お契のれおわ
車いふせはしやとあひづる節とてあれ翠竹の
ありてその媒始我くはんと噂りけて二人の愕然と
正ふられ二個の虚無僧一枚の粒粉めて編笠真深小被り
等しく搜り芝生お踏踏ね一個の鬘を剪り有髪れ尼の虚無僧
かゝ橋姫小眠よりてやあく 娘れ姫君よるはの傳母の狭
とくくえりあひりづるもいじや御父太宰少貳喜頼公の
御運はとて大和の方へと落しぬ世代志の娘御才なれ男扮
造進せとていへば入道あや 洗才をえりしは御行清と搜し
ふふだも巡あふ所のかとの娘子塚のうげよりえりし
猪環塚のいもつたせぬ御縁とて値りわすれらほし
わりがこやよと泣く涙を湧る泉のごとし一個の枕論も涙痕
咽すいも御曹司政則君えりしれいもや某のめこの推助
さりの播磨河落せしむの耐敵を欺く謀りて君が女子の状

落しまわしせしはよくも今日まを堪忍するものこそが英勇乃御
 嵐なり我くこれより芳野度ふりりして内侍所を棄ひ北朝に逃
 らせり赤松太宰再興の方寸の中おつりし變よのぞまを狭高
 としよもの雛鳥某一子右雅輔を御方お代らせ大功を成まで
 八人目次掩ふ良策なれば外面に兄弟内証の夫婦の御縁を契り
 て別れんとぞりしあも両家の親あてり從はく再會は喜びあふこと
 いひもはとざりしころほどに赤松太宰の二門次真一孝義貞烈
 を章し男女となり夫婦となるふりりて天下の人その神妙乃
 筆を賞し千載の美譚となれりかて男女のなうごらめれを誓
 縁ゆれもなれやと墓ふ手向に岡伽桶の提れあふや五し
 假ふしなれば妹と脊の冠のれもそとそとれ所は父の墳の
 殊勝あもえへし時不件の燕竹の節ふ軀をあて壁とすべし
 二膜の尾よりさつと割二隻の雀と化したるがそのさぬ妹脊を
 らし中いぬや雌雄の一番とされぬ風情あきたとゆれつとも願
 として飛去りし不測うりるれ次第なりさればそのころの童淫お
 竹も雀のあまよくとせりつと諷り此と論が崎の因縁より今よ
 作ら雀といふ事や中けのれとぞ

妹脊山卷之二畢

